

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報 [号外] 2009年8月19日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合) No.40】

革マル派の巧妙な浸透戦術に警戒しよう！

松崎氏や千葉氏らがいくら否定しようと、これまでの検証で明らかにした状況証拠から、JR総連・東労組への革マル派の浸透は間違いないと確信するが、読者の方々はどう判断されるだろうか。今後、松崎氏らが訴えている「JR革マル派43人リスト裁判」や「小説労働組合裁判」の審理が本格化する中で、さらに核心に迫る関係者の証言などが明らかにされるだろう。この裁判経過も注視し、しっかりと検証していきたい。

ところで、JR総連側が革マル派の浸透を否定する一方、革マル派は「九州労大量脱退事件」「坂入事件」に関して、機関紙「解放」の論文で「JR総連内の党員諸君は、いまこそ持てる力を存分に発揮して裏切り者四人組とこれに連なるすべての陰謀・策略分子をうち碎くために不退転の決意をもってたたかえ！」(No.29 参照)などと、JR総連内の革マル派党員に呼び掛ける形で、組織内の党員の存在を敢えて積極的に明らかにしてきた。

革マル派議長はJR労働運動の戦闘的・左翼的展開を訴える！

では、革マル派は党とJR総連との関係をどのようにみているのだろうか。黒田寛一に代わり革マル派議長に就いた植田琢磨氏の「『労組への介入』ではない！」なる論文（「解放」1608号、2000年2月28日）に、以下の興味深い記述がある。

このような危機的な事態を突破するためにこそ、既存の労働組合組織の外部につくりだされている革命党であるわが同盟は、あらゆる産別労働組合の内部でたたかっている戦闘的労働者とともに、JR総連労働運動の組織的防衛のために奮闘してきたし、今後もまたそうである。そもそも、「JR総連=革マル派」というキャンペーンは、警察権力やジャーナリズムやJR連合が流してきた神話でしかない。たとえ、JR総連というひとつの労働組合の内部で数千名のわが同盟員が活動していたとしても、この労働組合組織がただちに革命党组织であるとはいえないのあって、このことは自明のことながらである。労働組合組織と党组织とを二重うつしにしかの神話をデッчиあげている権力者とそれにつながるいっさいの徒輩の悪宣伝に抗して、革命的理論をもって武装し、今日の労働運動を戦闘的・左翼的に展開することこそが中心問題なのである。

常人には難解だが、「革マル派は労組外の革命党で、JR総連内に革マル派同盟員が多数活動していても、それは党组织ではない」との認識に立ち、労組内の同盟員が「JR総連=革マル派」の「悪宣伝」に抗し、強固な革命的理論を身に付け、組合員を引き入れて戦闘的・左翼的な労働運動を展開することが中心課題だ、と訴えているものと読める。JR総連が革マル派との対立や無関係を装うのは、このような理屈に基づくのだろうか。

2006年5月の政府答弁書では、革マル派活動家は約5,400人、前述の綾瀬アジトの分析資料では、JR総連内の革マル派構成員は約600名とされている。上記論文は数千名とも述べている。綾瀬アジト摘発は1996年だが、現状はどうなのか。革マル派活動家の養成源とみられる「JR労研」の「結成アピール」(No.10)は、上記論文の訴えと一致点が多いと感じる。非公然性の極めて高い革マル派の巧妙な組織への浸透戦術に対しては、強い警戒心が必要だ。「革マル派は一人もいない」どころか、JR労働運動を戦闘的、左翼的に展開しようとする革マル派活動家が増殖している危険性は非常に高いとみなければならない！